

# 『続虚栗』、その人間の磁場(上)

濱 森 太 郎

## 一 序

貞享三年(一六八六)正月、この年二十六歳の春を迎えた江戸蕉門の高弟宝井其角が、歳旦帳を発行して正式に一門を率いた(櫻井武次郎「芭蕉年譜」。「芭蕉必携」(学燈社刊)。李白を気取り、放胆を売り物にしていた硬派の其角が、後に、江戸座洒落風の元祖になろうと予測する者は、まだ誰もいなかった。しかし、『虚栗』

(其角編・天和三年刊)の中で、

犬引、とうふ狩得たり里夜興

朝貞の曉花もる犬の声憎し

其角  
樵花

などと無邪気に騒いでいた其角たちも、貞享二年七月の生類憐みの令や八月六日の浅草観音別当門前での犬殺傷事件、さらに翌年九月二十七日の遊仙人狩りへと続く強圧的な統治政策の前に、そういつまでも悪童でいる事は許されなかった。

貞享三年正月に成立した「日の春を」百韻は、宝井其角の発句

日の春をさすがに鶴のあゆみ哉

に始まり、文鱗の脇の句

みぎハに高き去年の桐の実

へと続く。其角の発句は、宗匠立机早々の晴がましさを鶴の優美な足さばきに重ねて言い現わしたものであり、文鱗の脇の句は、その鶴を遙かに見下ろす「去年の桐の実」を点描して、新旧調和した晴やかな新時代の到来を暗示したものである。江戸蕉門の新しい時代、ここに、芭蕉から其角へと移り変わる蕉門の世代交替を重ね合わせれば、これは、芭蕉自身にとってもかなり意味深長な発言だが、これに続く第三の作者枳風は、

雪村の柳見に行棹さして

と付けて、意味深長な挨拶の一場を軽く景色の句に転じている。以下、コ斎・芳重・杉風・仙化・李下・挙白・朱弦・蚊足・千里・芭蕉・執筆の十四名が次々に句を付け、さらに、五十句を過ぎるあたりから、揚水・不卜・千春・峡水の四人が新たに加わり、盛大な句会に終始した。

集まった連衆の中では、特に枳風・文鱗と其角との交友が親密で、すでに貞享二年五月三日、其角と枳風とは連立って箱根の木質温泉にある文鱗の旅亭を訪ねて歓談している。また、その時の旅の経緯を記した其角の『新山家』の原稿は、文鱗が校閲し、蚊足が筆記する体裁で出版された。これらの知友たちが、この新年の句会の主催

者でもあった。宝井其角の宗匠立机と相前後して、彼を中心とした新しい人脈が急速に形作られていたのである。

貞享二年（一六八五）四月末、宝井其角の箱根行きと前後して江戸に帰着した松尾芭蕉が、その事態をどのように迎えたかは知るよしもない。だが、約九箇月に及ぶ吟行の末にやっと帰りついた芭蕉を迎えて、しばし活気づいた江戸蕉門の人々から其角達の動静を聞くのに、そう多くの時間が必要だったとは思えない。その時の彼の心中を正確に捉える事はできないが、それでも、彼の心中が決して穏やかでなかった事は、容易に推察する事ができる。

貞享二年の師走には、次のような句が詠まれている。  
月、白き、師走は子路が寝覚哉

この師走の月は、たとえば、「世の人のすさまじきことにいふなる師走の月夜」（源氏、総角）という文句を引くまでもなく、世の人のすさまじき心の象徴である。<sup>注</sup>彼は、やはりちょうど一年前、名古屋蕉門の内紛に直面して、内心の不快を、

雪と雪今宵師走の名月歎

（笈日記）

という句に託している。また、「子路」は、そのすさまじい人の世に、孔子の八志<sup>ノ</sup>を実現しようとして切り刻まれ、ついに塩づけ肉にされた壮士である。其角の独立と相前後して、芭蕉は、その壮士の世俗に対する悲憤を身近なものとしている。

あるいはまた、貞享三年春、やはり越後高田から江戸に帰った服部嵐雪が、宝井其角の宗匠立机を機に芭蕉からの独立を企て、『戊辰歳旦』（貞享五年刊）や『若水』（貞享五年刊）を編集する経緯を考えても、やはり、この宝井其角の独立が投げかけた波紋は大きかったと見てよい。

そういう時流の中で、芭蕉・其角・嵐雪たちが、それぞれどのような人間の磁場を形成してゆくのか。私は、『続虚栗』（宝井其角編、貞享四年十一月刊）を通じて、それを見たいと思うのである。

## 二、「続虚栗」の企画

江戸蕉門の鬼才宝井其角が、宗匠立机を機にどのような新風を打ち出すのか、彼の人柄を知る周囲の俳諧師たちは、多大の興味を持って、其角の動静を眺めていただろう。ことに、其角の『虚栗』（天和三年刊）の風狂ぶりが一世を風靡し、それに続く、其角・芭蕉の上方吟行がその実践篇として喝采を持って迎えられた後であってみれば、周囲の俳諧師たちの期待もひとしおだったにちがいない。時代は、明らかに動いていた。徳川綱吉の新しい治政が、文学においても生活においても新しい対応を求めていた。もはや、談林風の支離滅裂な活力が喜ばれる時代ではない。だが、それに替る何かが見えにえている時代でもない。

その何かを摸索する新鋭の其角にとっても、立机記念の新句集には、是非とも『虚栗』を凌ぐに足る漸新さが必要だった。もちろん、其角一人の意気込みでそれができるわけではない。其角の構想に忠実に協力する協力者たちの力添えが是非とも必要だったのである。

かつて江戸蕉門を結集して『虚栗』を編集した宝井其角は、その点でも恵まれていた。江戸蕉門には、新風の先端を行く芭蕉が居り、その弟子の嵐雪や杉風が居た。其角の周辺には、蚊足・文鱗・破笠・枳風・孤屋・仙化・挙白・全峰が居た。さらにまた、この句集に華を添える作者として、内藤露沾がひかえていた。宝井其角は、これらの協力者たちを柱とする事で、新進宗匠としての自己の力量を

充分に誇る事ができるはずであった。

一方、貞享二年四月末、約九箇月に及ぶ甲子吟行の旅程を終えて江戸に帰着した松尾芭蕉も、やはり、新風への自信を深め、江戸での「能(き)句帳」(貞享二年正月二十八日付、山岸半残宛書簡)の出現を望んでいた。

また、つい最近、父(内藤風虎、磐城内藤藩主、貞享二年九月十日没)を失くした内藤露沾も、父の百か日を過ぎた貞享三年の新春には、おおかたの仏事から解放されていた。かくしてここに、『続虚栗』企画の期が熟するのである。

貞享三年正月、其角の歳巨帳に掲載された向井去来の発句  
元日や家にゆづりの太刀帯ン

が、『続虚栗』にも掲載されている。また、貞享三年春、鹿島詣を試みた岡本不卜の句が、『蛙合』(貞享三年閏三月成)と『続虚栗』とに、次のように分載されている。

○ 鹿島に詣侍る比、真間の継はしにて

継橋の案内顔也飛蛙

(「蛙合」)

不卜

○ 同游とかしまに詣ける比、海の日

波を離出るに「武蔵野の月といづれ

かさきにせん」といひて

松陰や旭見に行春の海

(「続虚栗」)

石田未得門の岡本不卜が、蕉門の『蛙合』の催のために、わざわざ遠出して句を作り、それを投じたとは考えにくい。すでに「日の春を」百韻に名を連ねている不卜は、貞享三年春、恐らく其角に乞

われてこの鹿島詣の句稿を其角の元に投じ、その中の一句が其角の計らいで『蛙合』の「番外」に掲載されたものと思われる。あるいはまた、『続虚栗』所収の松尾芭蕉の発句の大部分が、貞享三・四年の成立(全二十六句)。その内、貞享元年作一句、貞享二年作一句)である事も、『続虚栗』の企画開始時期の推定には役立つだろう。これらの事から見て、私は、『続虚栗』の企画開始時期を貞享三年春の頃と推定している。

さて、その貞享三年春、『続虚栗』編集の中心に居た宝井其角は、当然、自分が先に編集した『虚栗』を凌ぐに足る華やかな句集を望んでいた。その彼が、貞享三年春の段階で思い描いていた『続虚栗』と、それから約二年後に完成した現実の『続虚栗』とがどの程度重なり合うものか、それを正確に測定する手だてはない。しかし、それでも、貞享四年夏に起った其角の母の死や、貞享四年冬の芭蕉の再度の上方吟行は、さすが其角の予定表にも無かっただろう。したがって、それらに関連する追善の発句群や送別の発句群は除外してよい。とすると、後に残るのは、かなり平凡な四季句集のように見えるかもしれない。だが、その四季の句の中に、吟行の句が多数含まれている事を見過してはならない。たとえば、「春の部」の冒頭から拾えば、次のごとく延々と吟行の句が続くのである。

① 遊大音寺

梅が香や乞食の家ものぞかる、

② 春行

昼の鐘箒木きゆる霞哉

③ 同游とかしまに詣ける比、

海の日を離出るに

其角

仙化

「武蔵野の月といづれか  
さきにせん」といひて、

松陰や旭見に行春の海

海雲よる笹屋に近き朝日哉

浦おしや鶉の羽に曇る春日影

かとり

果のためか幣くはへ行村雀

板久の一夜うき名にも

あらねば

朧月いたこも捨ぬ情かな

中山の塔を見やりて

広き野の塔みよとてや舞ふひばり

宿からん真昼をおろす諸ひばり

旅行 こゝろよき水に

鬢を撫て

のどけしや鶴の飛込鬢かどみ

さらに「秋の部」を開いても、やはり延々と吟行の句が続き、それにつれて、いわゆる「四季」は、旅人の眼差しの中の物珍らしい風物の集合として、読者の前にその姿を現わす事になる。自然の風物ありのままに、旅人の眼差しの中で眺め直すというこの方策は、もちろん、「虚栗」以後芭蕉や其角の辿った心の軌道と重なり合うものである。新しい「四季」の発見、それが深化すれば、それは、蕉門の人々を、甲子吟行における芭蕉のように生きて呼吸する生命体としての天地自然の発見へと導いてゆくはずであった。そういう可能性を孕んだ吟行熱が、江戸蕉門の内部で急速に沸騰していたの

である。

旅のかたちの点では、芭蕉の旅が「行脚」だったのに比して、彼らの旅がおおむね「遊山」だった点で大きく喰違っはいたが、いざ「旅へ」という旅行熱に違いは無かった。宝井其角は、恐らくその流行を巧みに捉えて、これまでとかく「旅」への憧憬を語るに止まっていた江戸蕉門の風狂心を、一挙に、現実の旅の空に向かって解き放とうとしたのである。「統虚栗」編集のこの大綱は、貞享三年春の時点でも恐らくそのままだったにちがいない。

### 三、「蛙合」の試み

ところで、その貞享三年春、閏三月某日、江戸深川の芭蕉庵では、折から「蛙合」の合評会が催されていた。同年閏三月十日付、向井去来宛芭蕉書簡に、「比度蛙之御作意、爰元に而云尽したる様に存候処、又々珍敷御さがし、是又人々驚入申候」とあるところから見ると、去来が京都から蛙の句を投するより先に、江戸蕉門の内部ですでに蛙の句が募集されていた事になる。去来は、それを伝え聞いて、わざわざ京都から、

一蛙はしばし鳴やむ蛙哉

の一句を「蛙合」に投じたのである。「蛙合」の合評会は、この去来の句の到着の後に開かれた。したがって、それは、「蛙合」(仙化編)の冒頭に「何となく設たるに、四となり六となりて、一卷にみちぬ」と語られるような自然発生的なものとはやはり考えにくい。また、この言葉の後に、「かみにたち下にをく品の品、をのくあらそふ事なかるべし」とわざわざ断る気の使いようから見ても、この合評会は、恐らく全員参加(四十一名)の「衆議判」でもなかっただろう。



其角の『続虚栗』は、総句数七百十四句、作者数百十三人。嵐雪の『其袋集』は、総句数九百八十七句、作者数百九十四名。一人あたりの平均入集句数は、『続虚栗』が六句、『其袋集』が五句である。

考察を単純にするため、一応、各句集に一句しか入集していない作者を( )で囲んでみた。そうすれば、編集の義理でわずかに入集した陣笠組の俳人達を除外して考える事ができるからである。そこで改めて残りの人々を眺めてみると、まず、この『蛙合』の合評会に参加した主要な俳人達の内、芭蕉・全峰・嵐雪・挙白・仙化・文麟・孤屋・去来・枳風・破笠・蚊足・其角の十二人が、『続虚栗』に十句以上入集している事が明らかである。『続虚栗』に十句以上入集している人物は、全体で二十一名であるから、その半数が、この『蛙合』の合評会に参加していた事になる。しかも、それらの人物は、この合評会の席では、其角を頭目としておおむね右の席に座を占めている。

一方、嵐雪の『其袋集』では、この『蛙合』の合評会に参加した芭蕉・全峰・仙化・文麟・孤屋・去来・枳風・破笠・蚊足・其角の十名の句数が軒並み大幅に減っている。目立って増えているのは、素堂・琴風・嵐雪・卜宅のわずかに四人にすぎない。しかも、これらの人々は、琴風を除けばいずれも江戸蕉門の古参に属し、合評会の席では、左の座に席を与えられている。つまり、『蛙合』の合評会は、芭蕉を筆頭に素堂・嵐蘭・李下・嵐雪・挙白・杉風・卜宅といった蕉門の古参を左に配し、それに胸を借りるかたちで、右方に其角を筆頭にした『続虚栗』の面々が配されていたのである。これもまた、『蛙合』の合評会と『続虚栗』との関連を裏付けるだろう。この背

景に、江戸蕉門の古参に対する宝井其角の特別な配慮がある事は言うまでもない。もし、『続虚栗』の編集作業が順調だったなら、この「日常」の些事を新しい眼で見直そうとする『蛙合』の試みは、あるいは、『続虚栗』の「春の部」を飾るもう一つの眉目だったかもしれない。

#### 四、芭蕉のためらい

だが、其角の予期に反して、『続虚栗』の編集作業は、容易には、はかどらなかつた。

第一、芭蕉の態度がおかしかった。たとえば、貞享三年春、「旅」と「日常」とを主軸として『続虚栗』の編集活動を続けていたはずの宝井其角にとって、『野ざらし紀行』に収められた松尾芭蕉の発句は、当然『続虚栗』の巻頭を飾るにふさわしい眉目と見えたにちがいない。其角自身もまた、やはり貞享元年(一六八四)の上方吟行中の句を『続虚栗』にかなり多く収めているのである。

#### ① 勢田春望

やまざくら身を泣哥の捨子哉

#### ② 仁和寺

電かみなりのやどり木なりしさくら哉

#### ③ 淀舟や犬もこがるゝ郭公

#### ④ 僧正が谷(五元集、前書)

佗しらに貝ふく僧よかこん鳥

#### ⑤ (前略)市原寺にて

虫はむと朽木の小町干れたり

#### ⑥ 京出る日

片腕はみやこに残す紅葉哉

⑦かつちりて御簾に掃るゝ捲哉

今、詞書等で上方旅行中の作と推定できるものだけをさっと拾い上げて、このように多い。だが、松尾芭蕉は、『野ざらし紀行』の中から、

よしのゝ奥に一夜あかして

砧うちてわれに聞かせよや坊が妻

の一句を『続虚栗』に贈ったにすぎない。平凡な事実のようだが、松尾芭蕉は、山本荷兮の『曠野』には『笈の小文』から十四句を贈り、向井去来の『猿蓑』には『奥の細道』から九句を贈っている。

だが、むろん、芭蕉が『続虚栗』の編集に協力しなかつたわけではない。芭蕉は、『野ざらし紀行』の替りに『あつめ句』から十句『鹿島詣』から二句を取り、その他を交えて二十六句の発句を『続虚栗』のために用意したのである。その結果、発句の入集句数は其角の六十三句に次いで第二位となり、付句を交えても、其角・蚊足に次ぐ第三位の位置を占める事となった。

しかし、それこそ、実は重大な問題であった。『あつめ句』から『続虚栗』への入集の実際を知るために、まず、両者の句型を比較してみた。

⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	あつめ句	続虚栗
月雪とのさばりけらし <sup>(5)</sup> 年の暮	はつゆきや幸庵にまかりある はつゆき <sup>(4)</sup> や幸庵にまかりある じめて雪降けるよろこび	雲おり <sup>(3)</sup> ひとをやすめる 名月や池をめぐりて よもすがら	くさの戸ばそに住わびて あき風のかなしげなるゆ ひつかハし侍る 糞虫の音を聞にこよくさの いほ	髪はえて容顔青し五月雨	ほとゝぎすなく <sup>(1)</sup> とぶぞ いそがハし	永き日もさえつりたらぬ 暗ひばり ひばり哉	はらかなやものにもつかず 永き日もさえつりたらぬ 暗ひばり	はなのくもかねほうへのか あさくさか	草庵 花の雲鐘は上野か浅草か 原中や物にもつかず鳴雲雀 艸庵を訪ける比 永き日も囀たらぬひばり哉
月雪とのさばりけらし <sup>(5)</sup> ししの 昏	初雪や幸庵に罷有ル <sup>(4)</sup>	雲折 <sup>(3)</sup> 人を休むる月見哉 草庵の月見 名月や池をめぐりて 夜もすがら	糞虫の音を聞に来よ艸の庵 聴閑	髪はえて容顔蒼し五月雨	郭公なき <sup>(1)</sup> 飛ぞ聞はし いそが				

(濁点・句読点、筆者)

これら十句の表記をざっと比較してみれば、『統虚栗』に収められた句の方が、遙かに整理されている事は明らかだろう。たとえば④の「容顔蒼し」や⑦の「庵」・⑧の「としの昏」などは、表記を整える事が、そのまま句の意味を深化したり、句の読みを正確にしたりする効果を持っている。また、①の「なき」や⑥の「休むる」は、言葉使いの洗練を感じさせる。さらにまた詞書の点でも、①②③④⑤⑥⑦など、『統虚栗』の方が格段に整理され、凝縮されている。

雅文体で書かれた「あつめ句」の表記が必然的に仮名文字になる点は、もちろん考慮されなければならない。だが、それでも、当時の芭蕉の真蹟類には、

①花の雲鐘はうへのかあさくさか（『蕉影余韻』）  
や、

②ながき日もさへづりたらめ雲雀かな（『芭蕉の筆蹟』）

など「あつめ句」と「統虚栗」との中間の表記をとどめるものが現存する。しかも、その真蹟類では、たとえば、②の「さへづり」（あつめ句）のようにうかつに混同しがちな文字が、「さへづり」のかたちに改められている。さらに、中には、④の「髪はえて」の例のように、

○髪はえて容顔青し五月雨（『あつめ句』）

○髪はへて容顔青し五月あめ（『蕉影余韻』）

○髪はえて容顔蒼し五月雨（『統虚栗』）

のような経過を辿って訂正される例もある。したがって、もし、「あつめ句」の句型と「統虚栗」の句型との前後関係を問題にするなら、当然「あつめ句」の句型の方が先に成立したと考えられる。

つまり、先の十句は、まず「あつめ句」に収められた後、句集用に表現・表記を整えて「統虚栗」に投ぜられたのである。

「あつめ句」の成立は、貞享四年秋。松尾芭蕉が「笈の小文」の旅に旅立つのが、貞享四年の十一月。したがって、松尾芭蕉が「統虚栗」に句を投じた時期は、貞享四年秋以後十一月までの期間に限定される。とすれば、それは取りもなおさず、松尾芭蕉が、「笈の小文」の旅の直前まで、「統虚栗」への寄稿を決定しなかった事を意味するのではあるまいか。

同じ事は、「鹿島詣」所収の次の二句についても言える。

	鹿島詣	統虚栗
①	<ul style="list-style-type: none"> <li>○はきはらやひとよはやどせ 山の犬(杉風本)</li> <li>○萩原や一よはやどせ やまのいぬ(佐藤本)</li> <li>○萩原や一よはやどせ 山のいぬ(秋瓜本)</li> </ul>	萩原や一夜はやどせ山の犬
②	<ul style="list-style-type: none"> <li>○てらにねてまこと顔なる 月見哉(杉風本)</li> <li>○寺に寝てまこと顔成ル 月見哉(佐藤本)</li> <li>○寺に寝てまこと顔なる 月見哉(秋瓜本)</li> </ul>	鹿島に詣ける比宿根本寺 寺にねて誠がほなる月見哉

※濁点、筆者

この両者を比較してみれば、「鹿島詣」の場合は、推敲が重なるにつれて「統虚栗」の表記に近くなっている事が分かるだろう。「統虚栗」の「誠がほ」②という表記は、やや異例だが、「まこ



と顔」と書く、もっともらしい顔をしてという諧謔的な意味が先立つのを警戒しての処置と思われる。したがって、これらの二句もまた、『鹿島詣』の初稿本（杉風本）が完成した貞享四年八月から、芭蕉が『笈の小文』の旅に出發する貞享四年十一月までの約三ヶ月の間に、『続虚栗』に寄稿されたものと思われる。とすれば、貞享三年春にはすでに企画されていたはずの『続虚栗』の編集作業は、ずるずると延期され、この貞享四年の晩秋（または冬）の芭蕉の寄稿を得てようやくその形を整えた事になるのではあるまいか。

### 五、俳諧ディレクタントたちの顕彰

新進宗匠として『続虚栗』の編集に打ち込んでいたはずの宝井其角は、むろん、芭蕉の句稿の遅れを喜んではしなかっただろう。だが、明敏な彼は、松尾芭蕉が何故そうするのか、その見当はついにちがいない。

貞享二年正月二十八日、松尾芭蕉は、伊賀上野の旧友山岸半残に宛てて「（※半残の句を）江戸へ持参候而、能句帳も出来候はゞ加入可申候」と語っている。当時の芭蕉は、江戸蕉門の手に成る「能句帳」の出現を期待し、また、旅先での話題にもしていたのである。そして事実、『続虚栗』には、山岸半残の発句「のどけしや鶴の飛込賢かゞみ」が一句だけ入集している。

だが、この『続虚栗』が、松尾芭蕉の目に「能句帳」と映ったとは考えにくい。すでに檀上正孝氏の指摘された通り、この『続虚栗』には、かなり復古的にかつ派閥的な要素が混入しているからである。

たとえば、『続虚栗』の四季の冒頭は、それぞれ、次の人々によって占められている。

#### ① 春の部

新年の御慶とは申けり八十年

釈 任口

#### ② 夏の部

夜錦集 伏見西岸寺の地藏にまうで侍りて  
本尊に油かけた敷ほとゝぎす

意朔

#### ③ 秋の部

日もくれぬはや舟のれ男七夕

風虎

#### ④ 冬の部

旅人と我名よばれん初霽

芭蕉

「春の部」巻頭の作者任口は、伏見西岸寺の第三代住職で、延宝五年（一六七七）、内藤風虎が主催した「六百番発句合」には、北村季吟等と共に判者として列席している。また、この「六百番発句合」には、北村季吟門の芭蕉も、やはり風虎サロンの一員として名を連ねている。また、芭蕉は、貞享二年（一六八五）春、伏見西岸寺に任口を訪ねて「我きぬにふしみの桃の霏せよ」（野ざらし紀行）という挨拶句を残してもいる。だが、任口は、翌貞享三年四月、八十一歳で入寂してしまった（『俳諧大辞典』「任口」（岡田））。

任口の発句に云う「新年の御慶」とは、言うまでもなく新年を祝うことばだが、「新年に言葉は古き御慶かな 一幽」（小町踊）という用例もあるように、場合によっては古めかしすぎてユーモラスに響く言葉である。そういう言葉をよくも八十年も使い続けてきたものだと、任口は、おおらかに達観している。

貞享四年の『続虚栗』に、任口八十歳の春を記念するこの発句を掲載する裏には、当然、任口追悼の意味が含まれていただろう。

「夏の部」冒頭の伊勢村意朔の発句も、やはり「本尊カケタカ」

と鳴くほととぎすの鳴声をおおっぴらにもじったもので、他意はない。ただし、「伏見西岸寺の地藏にまうで待りて」と前書して、その西岸寺の住職任口との旧交を明示し、さらに句の頭に「夜錦集」（寛文六年成、内藤風虎編）と傍書して、内藤風虎との交友をも暗示している。

伊勢村意朔は、大阪季吟門の重鎮で、「統山井」（寛文七年刊、湖春編）・「蛙井集」（寛文七年刊、山口清勝編）・「落花集」（寛文十一年刊、高滝以仙編）に頻繁に顔を出す作者だが、ことに「難波草」（寛文十一年刊・中村宜久・井口如貞編）では、師匠の北村季吟（百六十四句入集）をしのぐ二百十五句の入集をみてゐる。

一方、「秋の部」冒頭の風虎は、江戸におけるいわゆる風虎サロンの主催者内藤風虎であり、彼もまた貞享二年（一六八五）九月十九日に没している。したがって、その風虎の句及びその句集の名を『統虚栗』に掲載する事にも、当然、風虎顕彰の意味が含まれていただろう。京（伏見）の任口・大阪の意朔・江戸の風虎、彼らの句が各々そうであるように、大らかなユーマアの時代を生きた俳諧のディレッタントたちが顕彰されている。

かつての風虎サロンと『統虚栗』の編者たちとがどのように結びつくのかは不明だが、しかし、内藤風虎の次男内藤露沾は、『統虚栗』に十五句入集（付句六句を含む）し、露沾の取巻きである門田沾徳は十句（付句六）、露荷二十一句（付句十九）、沾蓬八句、沾荷四句、由之十七句（付句五）。この事実は、内藤露沾に対する宝井其角の並々ならぬ配慮を示しているのではあるまいか。

六、嵐雪周辺の作者たちの処遇

ところが、同じ蕉門であるにもかかわらず、服部嵐雪の周辺は、はっきりと無視された。嵐雪自身の入集句数こそ二十四句（内、付句十一句）を数えるが、たとえば、『統虚栗』と前後して出版された嵐雪の『つちのえ辰のとし歳旦』（貞享五年刊）と『若水』（貞享五年刊）と共に入集している作者たちが、『統虚栗』にそれぞれ何句入集したかを見ればよい。

No.	作者名	句集名	成辰歳旦 入集句数	若水入 集句数	統虚栗 入集句数
1	依依	其角	1	(2)	0
2	山店	濁子	1	(3)	1
3	如泥	翠桃	2	(5)	5
4	水萍	夕菊	1	(3)	0
5	曾良	苔翠	1	(3)	0
6	千り	泥芹	1	(3)	2
7	当歌	風泉	1	(3)	0
8	蚊足	ト干	2	(5)	0
9	ト干	ト干	2	(3)	38
10					(18)

28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17
●				●					●		
李下	嵐家	嵐集	嵐竹	嵐雪	嵐水	嵐序	嵐萩	友五	野馬	北鯤	卜宅
	1	1	1	4	1	1	1	1	2	1	1
(3)				(3)							
(5)	(1)	(3)	(3)	(12)	(3)	(1)	(1)	(3)	(3)	(5)	(3)
6	0	0	0	24	2	0	0	0	22	0	0
				(11)					(12)		

※( )内は、付句数。  
 ●印は、『続虚栗』においても厚遇されている作者を示す。

貞享四・五年当時、嵐雪の周辺に居たこれら二十八名の作者たちの内で、『続虚栗』でも厚く処遇されている作者は、其角・嵐雪の兩人を除けば、濁子・如泥・蚊足・ト干・野馬・李下の六名だが、この中には、後々まで嵐雪の句集に顔を出す人物は一人も含まれていない。

また、元禄三年に刊行された嵐雪一門の代表的な選集『其袋集』に十句以上入集している人物と『続虚栗』のそれとを比較してみても、その差別は歴然としている。

※●印は両集に共通する人物 ※( )内の数字は付句の数

沽徳	虚谷	全峯	● 举白	露沾	去来	巴之	仙風	魚児	积風	観水	文鱗	孤屋	露荷	● 野馬	● 嵐雪	● 破笠	● 芭蕉	蚊足	● 其角	「続虚栗」十句以上入集者		
10	10	12	12	15	15	17	17	17	17	17	19	19	21	22	24	24	31	38	140			
(6)	(5)	(4)	(4)	(6)	(5)	(6)	(10)	(1)	(4)	(4)	(2)	(12)	(19)	(12)	(11)	(18)	(7)	(18)	(77)			
沽荷	笠下	菊峯	素堂	笠凸	琴風	● 芭蕉	● 举白	● 園女	衛門	秀和	立志	● 鋤立	● 其角	冰花	立吟	舟竹	桐雨	山川	月下	百里	● 嵐雪	「其袋集」十句以上入集者
10	11	13	13	14	14	14	15	16	17	20	23	26	28	28	29	29	31	32	34	34	145	
(5)	(9)	(9)	(9)	(8)	(6)	(9)	(9)	(12)	(11)	(12)	(11)	(17)	(12)	(12)	(11)	(11)	(11)	(11)	(86)			

両書を比較すると、嵐雪の『其袋集』で厚遇されている作者で、しかも『続虚栗』でも厚遇されている作者は、其角・挙白・芭蕉・嵐雪の四人にすぎない。その中から両書の編者を除けば、あとには挙白と芭蕉とが残るだけである。

さらに、これら『其袋集』で厚遇された人々の、『続虚栗』における入集句数の少なさは、次の通りである。

作者名	「其袋集」入集句数	「続虚栗」入集句数
●嵐雪	145	24
●百里	(86)	(11)
月下	(11)	0
山川	(11)	0
桐雨	(12)	1
舟竹	(12)	0
立吟	(17)	2
氷花	(12)	0
●其角	(11)	140
●鋤立	(12)	(77)
立志	(11)	0
秀和	(12)	0
衛門	(12)	2
園女	(9)	0
●挙白	(9)	12
●芭蕉	(6)	31
●百花	(8)	0
琴風	14	2

●笠凸	14	(9)	0
●素堂	13	(9)	5
●菊峯	13	(9)	0
●笠下	11	(9)	0
●沾荷	10	(5)	4

※●印は、両書で共に厚遇されている作者

※( )内の数字は付句の数

蕉門の高弟服部嵐雪二十四句、芭蕉の親友山口素堂五句、露沾の取巻きの沾荷四句。これらの人物を除いてみれば、嵐雪周辺の作者たちが『続虚栗』で冷遇されている事は、一目瞭然である<sup>注7</sup>。宝井其角の『続虚栗』編集活動を契機にして、江戸蕉門の内部に、深い亀裂が生れ始めていたのである。

このような事態に直面すれば、芭蕉ならずとも『続虚栗』への積極的な肩入れをためらうであろう。そのためらいの内に、恐らく貞亨三年は暮れるのである。

注1、「師走の月」がすさまじい人の世の象徴である事は、「師走の月」という前書を持つ次の発句「冬がれば白髪遊女の闇の月風潮(虚栗)」などによっても確かめられる。

注2、ただ一人「敗」とされている「水友」は、あるいはこの「蛙合」に衆議判に参加していたかもしれない。でなければ、彼一人が一方向的に切り捨てられた事になるからである。

注3、白石氏が直接「日常の些事を新しい眼で見直そうとする云々」と言っているわけではない。「俳句のすすめ」(昭和51年、有

斐閣)所収「蛙——滑稽と新しみ」参照。白石氏が、この「古池」の句を通じて小さな生命への関心に言及しておられるので、その心意を私なりに普遍してみたものである。

注4、井上敏幸氏は、当時の芭蕉の文学上の主題を「旅」と「庵」との二つに要約されている。(「芭蕉庵の形象——あつめ句」序論——)『文学』一九七五年十二月号)。ここでは、その「庵」(つまり庵住の生活)をやや広く解して「日常」という言葉で言ってみた。

注5、「江戸蕉門形成の一過程——虚栗」から『続虚栗』へ——(『近世文芸稿』17号、一九七三年二月刊)参照。

注6、生没年未詳。彼もまた『六百番俳諧発句合』の参加者である。

注7、排他的な点では嵐雪の『其袋集』も同様だが、今はとくに触れない事にする。